



うへにさぶらうプテラノドンは
高いがけにしか降りられない。
うへにさぶらうプテラノドンは
地上におりるとしんでしまう。
うへにさぶらうプテラノドンは
白神山地ができたころ生きていた。

うへにさぶらう私たちは
その九千万年後白神山地を覗いた。
うへにさぶらう私たちは
プテラノドンのすがたを見た。
うへにさぶらう私たちは
白神山地の歴史を見た。

うへにさぶらうプテラノドンは
さらにいとおかし。

(原文のまま)

谷藤 佐喜子

プテラノドンの話

上記の詩は一九九〇年、作者が高校2年生の時、二ツ森に登り、山頂に立った時の感動をその夜宿舎でわら版紙にさらさらと書かれたものでした。

登山中に白神岳を中心に広く見渡される場所で、白神山地の土台となっている地質について紹介し、最も古い岩石ができた頃、恐竜の一種であるプテラノドンが飛び回っていたことを話しました。続けて、プテラノドンの翼は大きすぎて平地に降りると、もう飛び立つことができなく、地面に降りる時は必ず高い崖に降り、飛び立つ時は崖からとび出すようにして舞い上がったことなどを話していたのです。

八峰町の地形や地質をみると、これに似たたくさん物語りができます。これらを来町された人たちに紹介しているのがジオパークの考えです。

八峰町ジオパークの特色

世界自然遺産地域を東方にひかえている八峰町はほとんど手つかずの自然林からなる遺産に隣接していることになりす。その自然林を眺めようと人々が当町を訪れるようになりました。しかし、遺産地域に入山することは原則として禁止されています。つまり白神山地の成り立ちを説明するための地層や岩石などにはじかに触れたりできません。

しかし、幸に13万haにも及ぶ白神山地の西端が、あたかもデコレーション



◆人生の節目に無病息災を祈願

厄払いと還暦の年祝いを開催

2月1日、厄年の修祓式が峰浜地区は峰栄館で、八森地区は白瀑神社で行われました。

峰栄館では、数えの42歳(男性)と33歳(女性)が白同で厄払い、出席者は神妙な面持ちで玉串奉奠などを行いました。

終了後は、一人一人神主から御神酒を拝受し、記念撮影を行いました。

八森地区では、白瀑神社の本殿に集まって、それぞれお払いを受け、玉串を奉納し健康を祈願しました。

終了後は久しぶりに会った仲間との再会を喜び合い、記念写真を撮影していました。

また、数え60歳の還暦年祝いも両地区に分かれて開催され、多数の方々が出席し、旧友との再会を喜び合ったりするなど、にぎやかな「年祝い」となりました。



無病息災を祈願してお払い(白瀑神社)



御神酒を拝受(峰栄館)



玉串を捧げ祈願(峰栄館)



ケーキを切るように海の荒波によってけずり取られているのです。つまり遺産地域に入ることなく海岸を歩くことでケーキの中身をじかに見、ふれることができるということなのです。

秋田大学教授林信太郎氏がこれまで度々行って下さった講演や現地案内で口にしてきた「白神山地はなぜ高い？」について考え思いつくすにはどうしてもケーキの中身をみる必要があります。それが岩館海岸で連続してみられるという大きな特色が八峰町にはあります。

これまでの調査からは、9千万年ほど前から現在まで4回の火成活動(マグマが冷えて岩石になるまでの活動)が考えられていて、それぞれの活動にはそれぞれの壮大なドラマが隠されています。それらのドラマを構築していく楽しさは、どんなクイズを解くよりも楽しい活動と思われれます。

次回からは各ジオサイト(地層などをみる事ができる場所の意)の紹介を林先生を中心に連載していきます。お楽しみに。

冒頭の三連詩の最後「さらにいとおかし」から、ふとプテラノドンの顔を頭にえがいてみて、思わず笑みがこぼれました。

当町では、昨年5月「八峰町ジオパーク推進協議会」を設立し、平成24年度に日本ジオパーク認定を目指し活動しております。

八峰町ジオパーク推進協議会
会長 工藤 英美